

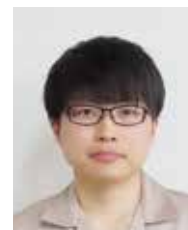
拠点報告

株式会社名村造船所

(株)名村造船所 伊万里事業所 紹介

岩下 健太*

Iwashita Kenta



佐賀県伊万里市に所在する伊万里事業所は、当社唯一の製造拠点にして、当社グループ内最大の事業所です。「自然と対話のできる夢のある工場」¹⁾²⁾をキャッチフレーズとする伊万里事業所は、内海で波の静かな伊万里湾に面する七ツ島工業団地の約半分の広さを占め、敷地面積は東京ドーム 15 個分に相当する約 72 万㎡となっております。

本稿では、まず伊万里事業所の立地する伊万里市についてご紹介し、次に伊万里事業所の概要、事業内容、最後に伊万里事業所と地域社会との協調・融和の関係についてご紹介致します。

1. 伊万里市の紹介

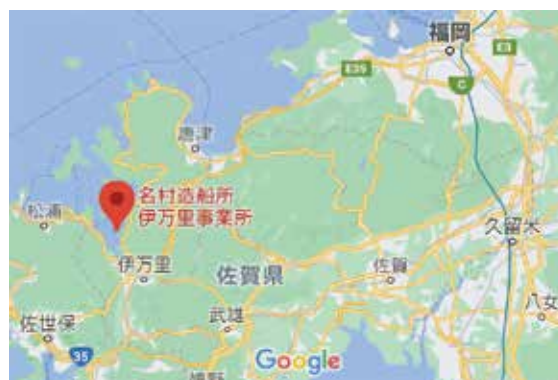
佐賀県伊万里市は、九州地方の北西部に位置する人口約 5 万人の小都市で、面積 255 km²の大半を山地と丘陵地帯が占める自然豊かなところです。

伊万里湾はリアス式海岸で水深が深く、細長い湾の入口にある福島や鷹島（共に長崎県松浦市）が外海に対する壁の役割を果たし、天然の良港となっております。近世には、湾奥部にあった港町（伊万里津）が、近隣の窯元で生産された磁器の積出港として栄え、その地名をとって「伊万里焼」と呼ばれ、世界的に広く知られていました。明治期には、日本海軍が西日本一帯の防衛などの拠点として九州地方に軍港を置くにあたり、佐世保湾と並ぶ候補の一つとして伊万里湾が挙げられたこともあります。

明治から昭和にかけては、伊万里近辺には数多くの炭鉱があり、一時人口は 8 万人を超えましたが、エネルギー革命に伴っていずれの鉱山も 1970 年代初頭までに閉山しています。それに前後して伊万里湾で臨海工業地帯の形成が推進され、当社のほかシリコンウェーハメーカーや木材関連企業の工場が立地するなど、一定の産業集積がみられるようになっております。

第 1 図に伊万里市および伊万里事業所の位置を示します。伊万里市は、佐賀市から西へ 40km、福岡市から西南西へ

70km に位置し、それぞれから自動車で 1 時間ないし 1 時間半ほどでアクセスが可能です。また、佐世保市からは 25km 程度で、場所によっては 30 分ほどでアクセスが可能です。



第 1 図 伊万里市および当社伊万里事業所の位置

2. 伊万里事業所 概要

2. 1 沿革²⁾³⁾

伊万里事業所の歴史は、高度経済成長期の終盤にあたる 1960 年代末、大阪市住之江区北加賀屋の木津川沿いに所在した当社本社工場に代わる、船型大型化と生産性向上に対応できる新鋭工場の建設を計画したことに端を発します。

工場建設候補地として瀬戸内や北部九州の複数地が検討された中で、最終的に 1971 年（昭和 46 年）、伊万里湾の七

原稿受理日：July 31, 2020

* 株式会社名村造船所 経營業務本部 総務部 総務グループ

ツ島地区への建設を決定、1972 年(昭和 47 年)に同地の埋立・造成を開始、1974 年(昭和 49 年)に竣工(建造ドックが完成)しました(写真 1)。その後、工場機能の全てを伊万里に統合しております。

伊万里事業所では早い段階から生産に IT を活用する取り組みを始めており、1979 年(昭和 54 年)には日本造船業で初めて NC 切断情報のオンライン化に取り組み、1987 年(昭和 62 年)には、スケジュールシステムの構築による工程管理、1992 年(平成 4 年)にはその工程計画と連動した資材調達システムの稼働、1996 年(平成 8 年)には船の設計から建造までをシミュレーション可能な 3DCAD システ

ム「VISION」の独自開発に取り組んでおります。

2000 年代に入ると建造能力の向上を目的とした大型設備投資が実施され、総組定盤の増設、ブロック置場整備、建造ドックへの 800t ゴライアスクレーン 2 基の新設などが行われました。

以上のように操業開始以来半世紀近くにわたり、様々な業務効率改善の工夫のほか、生産設備の増強・省人化や IT 化などの設備投資の積み重ねにより、現在では国内有数の建造能力を持つ造船所となっております。

写真 2 に現在の伊万里事業所の全景を示します。



写真 1 伊万里事業所全景 (1974 年(昭和 49 年))



① 本館・総合事務所	⑤ プラスト工場	⑨ 7A総組定盤	⑬ 先行艀装工場
② (株)伊万里鉄鋼センター	⑥ 建造ドック・4A総組定盤	⑩ 300t ゴライアスクレーン	⑭ ブロックヤード
③ 第1船殻内業工場	⑦ 800t ゴライアスクレーン	⑪ 第2船殻内業工場	⑮ 2号岸壁
④ 塗装工場	⑧ 管工場及び集配場	⑫ 第3船殻内業工場	⑯ 4号岸壁

写真 2 現在の伊万里事業所全景 (青字点線部分)

2. 2 従業員数

2020 年 (令和 2 年) 7 月 1 日現在の当社の従業員数 1,048 名のうち、伊万里事業所勤務は 1,002 名となっております。そのほか協力工なども含めると、常時 2,000 名以上が伊万里事業所で就業しております。

2. 3 工場レイアウト

伊万里事業所の強みは、その直線的かつ余裕のあるレイアウトです。とりわけ写真 2 に示すように、長さ 500 メートル・幅 200 メートルに及ぶ第 1 船殻内業工場と長さ 450 メートルの建造ドック・4A 総組定盤が T 字型に配置されていることにより、進水に至るまでの建造プロセスが一直線で結ばれていることが大きな特徴です¹⁾²⁾。

(株) 伊万里鉄鋼センターでの鋼材の水切り、仕分け、ショットブラストから第 1 船殻内業工場 (写真 3) での切断、曲げ加工、小組、中組、大組、先行艤装と工程が直線的に流れ、最後に内業工場から出棟された船殻ブロックは自走式搬送台車でショットブラスト、塗装工場を経て総組定盤に搬送されて総組後、800t グライアスクレーンで建造ドックに搭載されます。写真 4 に示す通り、正門脇から始まる第 1 船殻内業工場から建造ドックに至るまで、まっすぐと続いていることがわかります。

2. 4 建造ドック・4A 総組定盤

写真 5 に示す建造ドックは長さ 450 メートル、幅 70 メートル、深さ 11.5 メートルの、セミタンデム方式と呼ばれるもので、第 2 図に示すようにドックの両側および中間にゲートが設けられております。これにより、船体のサイズによっては 1 隻+半隻を同時に建造することを可能としております。

建造ドック・4A 総組定盤上には 800t グライアスクレーンを 2 基設置し、搭載ブロックの大型化によるドック回転率の向上に寄与しております。そのほか、30t 水平引込式クレーン 1 基、30t ハンマーヘッドクレーン 2 基を設置しております。

2. 5 大型設備投資と東部地区

写真 2 の上部となる東部地区は、2000 年代に実施された大型設備投資に伴って整備された地区であり、第 2 船殻内業工場、第 3 船殻内業工場、7A 総組定盤、塗装工場などがあります。

東部地区の整備により、建造プロセスが第 1 船殻内業工

場から建造ドックに至る直線では収まらず、敷地内の東西に分かれるようになりましたが、自走式 1,000t 台車 (写真 6) を導入したことで、大型ブロックをスムーズに移動させることが可能となり、建造効率は高く保たれております。



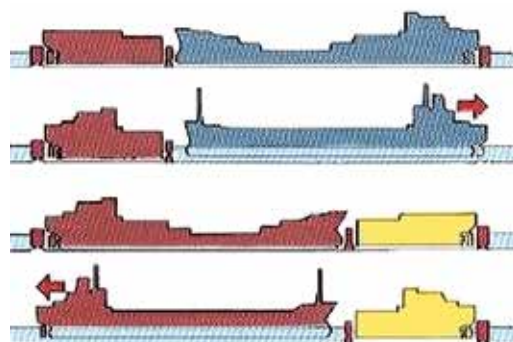
写真 3 第 1 船殻内業工場内部



写真 4 正門から建造ドック方面を望む



写真 5 建造ドック・4A 総組定盤



第 2 図 セミタンデム方式



写真6 1,000t 自走台車で運搬される大型ブロック

なお、7A 総組定盤にある 300t ゴライアスクレーンは、建造ドックのゴライアスクレーンを大型設備投資により吊り上げ能力 300t から 800t に変更した際に、建造ドックから移設したものです。写真 7 に建造ドックに 800t ゴライアスクレーンを設置する際の様子を示します。



写真7 ゴライアスクレーン新設風景

2. 6 艀装岸壁

伊万里事業所には、東部地区に 2 号岸壁、西部地区に 4 号岸壁があり、使用可能な岸壁の総延長は約 850m となっております。また、2 号岸壁、4 号岸壁それぞれに艀装用として 30t 水平引込式クレーンを 1 基ずつ設置しております。

2. 7 本館・総合事務所ほか

第 1 船殻内業工場の東側には、本館ならびに総合事務所があります。総合事務所はオフィスとして、管理間接部門、設計部門などが使用しております。本館は主に迎賓用として使用しているほか、当社百有余年の歴史を伝える名村記念室があります。

その他の設備として、先行艀装工場、艀装内業工場、利材センター、ブロックヤードなどがあり、当社の船舶建造能力を支えています。

3. 事業紹介

3. 1 船舶海洋事業部

1975 年（昭和 50 年）3 月に伊万里工場の第 1 船である 90 型タンカーを引渡して以来、2020 年（令和 2 年）7 月までに建造し世界の海に送り出した新造船は、400 隻以上となっています。

現在では中型から大型のバルクキャリア、タンカーを中心に、建造可能な船種を多く取り揃えたプロダクトミックス体制をとり、市場のニーズの変化に柔軟に対応しております。主力商品は、25 万重量トン型鉱石運搬船「WOZMAX®」（写真 8）や、31 万重量トン型 VLCC（写真 9）、ケーブサイズ撒積運搬船（写真 10）などに代表される大型の資源運搬船となっております。

近年では、事業部内に技術開発センターを設立するなど、研究開発を通じて顧客のニーズに沿った製品を提供できるよう努めております。2019 年（平成 31 年）に低温式 LPG 運搬船（写真 11）を竣工させたほか、世界初となる LNG を燃料とする大型石炭専用船が 2023 年（令和 5 年）竣工予定となっております。また、LNG を燃料とする鉱石運搬船「WOZMAX® type GF」の開発を進めております（WOZMAX® type GF については本誌 14 頁に掲載）。

創業以来百有余年にわたる人的資源の蓄積や、設備のポテンシャルの高さをフルに活かし、新製品の開発、品質の向上、生産効率の向上に日々邁進しております。



写真8 鉱石運搬船「WOZMAX®」第2世代（2500RE）



写真9 VLCC（310TK）



写真 10 ケープサイズ撒積運搬船 (183BC)



写真 12 2号岸壁で地組立される伊万里湾大橋



写真 11 低温式 LAG/LPG 運搬船 (38MGC)



写真 13 鷹島肥前大橋

3. 2 鉄構事業部

橋梁や沿岸施設などの鋼構造物の設計・工事を行っております。1978 年（昭和 53 年）の伊万里への海洋陸機部設立³⁾以来、九州地方を中心に受注・工事実績を多数重ねているほか、現在では大阪・名古屋を拠点に九州外の地域における受注活動にも力を入れております。

代表的な施工実績として、伊万里湾大橋（写真 12）、鷹島肥前大橋（写真 13）、六角川大橋（写真 14）などが挙げられます。



写真 14 架設中の六角川大橋

4. 地域社会との関係

伊万里事業所では、地域の皆様へ感謝の気持ちをお伝えするべく、様々な地域貢献活動を行っております。

4. 1 名村カップ 伊万里ジュニア駅伝

毎年 12 月に伊万里市二里町の国見台陸上競技場にて開催している「名村カップ 伊万里ジュニア駅伝」は、青少年のスポーツ振興、地域社会の発展の一助となることを目的として、当社が共催を務める駅伝大会です（写真 15）。1993 年（平成 5 年）から毎年開催しており、現在では地域の年中行事として、すっかり定着しております。

当大会には伊万里事業所の従業員も運営スタッフとして



写真 15 「名村カップ 伊万里ジュニア駅伝」の様子

一部参加しており、競技終了後には競技に参加した子どもたちやその保護者の方をはじめとする来場者の皆さんに、ぜんざいを振る舞っております。

4. 2 いまり秋祭り『総踊り』

毎年10月下旬に催される「伊万里トンテントン祭」(伊万里供日)は、地元の伊万里神社の御神幸祭です。「荒神輿」と「団車」の合戦が名物の、「日本三大けんか祭り」の1つとされる祭りで、毎年多くの人出で賑わいます。

併せて開催される「いまり秋祭り」(主催:いまり秋祭振興会)のイベントのひとつとして行われる「総踊り」には、毎年、伊万里事業所長をはじめ新入職員など伊万里事業所勤務の従業員の一部が当社の代表として参加し、練習の成果を披露しております(写真16)。また、「総踊り」の最中には、沿道で応援してくださっている方々に日頃の感謝の気持ちを込めて、お菓子の詰め合わせを振る舞います。

4. 3 遣唐使船レース

毎年8月下旬に佐賀市久保田町の嘉瀬川で開催される「遣唐使船レース」(主催:同レース推進協議会)は、奈良時代に鑑真和上が当地に上陸されたことに因んだ手漕ぎボートのレースで、佐賀県内外から自治体・企業・大学生・高校生などの約40チーム・1,600人ほどが参加しています。

当社は、第1回大会から20年以上にわたり「名村ふんどし〜ず」として毎年参加しており(写真17)、現在では主に鉄構事業部員と新入職員が参加しています。全参加チーム中、当社は最多出場回数となっており、レースの結果もさることながら、漕ぎ姿により一際大きな“存在感”を発揮しております。

5. まとめ

このたび、当社伊万里事業所についてご紹介させていただきましたが、入社して半年にも満たない勉強不足の身ゆえ、内容には拙い部分が目立ったかと存じます。以下では、入社してから学んだことや、執筆過程における諸先輩方のアドバイスや様々な資料閲覧を通じて得た所感を、まとめに代えさせていただきたく存じます。

造船業の大きな魅力は、多くの人手を必要とする産業であることから地域との関係が密接であるという極めてローカルな側面を持ちながらも、船舶の市場は世界単一であり極めてグローバルな産業でもあるという、二面性に由来するところにあるのだと、私は感じました。伊万里事業所で働く諸先輩方も、地域に根付きながらその視野は常に世界を広く見据えており、使命感に溢れていると感じます。

そして、“グローバル化”がメディアやアカデミズムで取り沙汰されるようになる遥か以前から、当たり前のように



写真16 「いまり総踊り」に参加する当社従業員



写真17 遣唐使船レースに参加する「名村ふんどし〜ず」

当社および伊万里事業所は過酷なグローバル経済の荒波に洗われてきたということに、歴史を紐解くことで気付かされました。伊万里事業所が様々な試練を乗り越えてきたことは諸先輩方の絶え間ない創意工夫の積み重ねがあつてのことであり、伊万里事業所が今あることは決して当たり前のことではないのだという実感を強くしております。

米中貿易摩擦や新型コロナウイルス感染拡大の影響で、世界経済が以前にも増して一段と大きく動揺している昨今ですが、この苦境を“生き抜き飛躍”出来るよう、私もまた創意工夫を交えながら役割を果たし、諸先輩方と肩を並べ“存在感”を発揮できるよう成長していきたいと存じます。

本稿を執筆するにあたり、適宜助言や資料の貸与など、ご協力頂いた皆様、ありがとうございました。

参考文献

- 1) 株式会社名村造船所:「自然と対話のできる 夢のある伊万里工場概要」1972年
- 2) 古賀福湊:「(株)名村造船所 伊万里工場の概要」『日本造船学会誌』第563号, 日本造船学会, 1976年
- 3) 名村造船所百年史編集委員会『名村造船所百年史』2012年